

【政治研究所主催講演会】

国際社会における NGO の役割

認定 NPO 法人アイキャン

海外事業部長 吉 田 文 氏¹

みなさん、こんにちは。認定 NPO 法人アイキャンから参りました吉田と申します。国士舘大学のみなさんにはこれまで、私たちの活動をいろいろと支えて頂きました。フィリピンでのスタディツアーに参加して下さったり、あるいは東京で開催されるグローバルフェスタでわたしたちのブースのボランティアとしてお手伝い下さったり、文化祭での売り上げをフィリピンでの活動のために寄付頂いたり、多くのご支援を頂戴してきました。改めて感謝申し上げます。

まず、自己紹介とわたしたちの団体についてお話しします。岐阜県で生まれ育ちました。ICAN に入って今年で 11 年目になります。その前は、ベンチャー企業で、営業職を 4 年半くらいやっていました。その当時、NGO に憧れていて、「海外を飛び回って格好いいな」とか、「世界の課題を解決するってすごいな」と考えていました。どちらかというと、「絶対にこの問題を解決したい!」といった崇高な思いからというよりも、その存在への憧れで転職したというのが正直なところです。ただ転職したばかりの時は、自分の決断の意味をあとになって実感することになりました。いちばん変わったのは、お給料です。NGO へ転職したことで、給料は以前働いていた時よりかなり少なくなりました。前職で働いていた時はお金が入ってくるのが当たり前という感覚しかなかったので、お金よりもやりたいことを優先したいと思っていました。多分そういうことは

1 本稿は、2019 年 6 月 28 日（金）、5303 教室で開催された政経学部付属政治研究所主催講演会の内容を収録したものです。アイキャンは 1994 年から危機的状況にある子供たちの生活改善のために活動する NGO です。尚、本文ではその時点での職位を記したことを予めお断りします。

結構あると思うのです。「お金じゃなくてやり甲斐だ!」とか、「生き甲斐だ!」とか。でも私はその当時、NGO に就職したことで本当に経済的にかつてのような余裕がなくなり、好きなこともできない状況に直面しました。「あっ、お金ってとても必要なんだな」ということを身に染みて感じたことを覚えています。人の幸せというものはそれぞれの価値観があるので、もちろんお金が全てということが言いたいわけではないのですが、そういうなかから 11 年と今まで NGO で働いている形になります。どうしてこんなに長く NGO で働いているのだらうなと思うことがあるのですが、その時に思い返すことがあります。それは、大学の時の一つの経験です。大学時代の私は平凡な大学生でした。特に夢があったわけでもなく、アルバイトでお金が貯まれば大学が休みのときに海外旅行を楽しんでいました。そのなかで途上国に行くことが何回かあり、その中にたまたま訪問したある国で、人が死ぬというショッキングな現場を目の当たりにしたことがありました。その亡くなった人というのは、物乞いとして生きている男性でした。私はいつも同じ道を通っていてその人と出くわすことが何度かあり、挨拶をしたりだとか、ちょっと話したりしていました。ところがある日のこと、その人が路肩に座り込み全く動かなくなっていました。当時私にとって、人が死ぬということは、その周りには死を悲しみ悼む人がいるものであるとか、白い菊などの供花に囲まれているであるとか、綺麗な装束を身にまとっていることが当たり前であると考えていました。死という厳粛な瞬間にも人間の尊厳が保たれることが当たり前であると知らず知らずの間に考えるようになっていた私には、虫けらのように人間が亡くなっていく残酷な現実がいままで経験したことのないショックを覚えしました。眼前に佇むその男性は、いつも路上で物乞いをしているときのままの格好をしていて、周りには悲しむ人はもちろん誰もいないし、むしろ動かなくなったので、体の上には風で飛んできた無数のゴミが集まるような状況でした。それを見た時に、ちょっとこの表現が正しいのかは分からないのですが、人間のいのちは平等ではないと思ったのです。人のいのちはみんな、平等に尊くはない。つまり、どの国に生まれたのか、どれだけ豊かなのかということで、人間の存在は、その価値の点で差

異があるのではないか。非常に逆説的ではありますが、当時まだ二十歳前の私は直感的にそう感じたのです。学校では当たり前のようにみんなのちは平等であるとか、人生は一回きりなのだから貴重であるとか、何度となく教わってきたと思うのですが、眼前で亡くなった男性から、私はそれを感じることができなかったのです。「どうしてこの男性はここに放って置かれるのだろう。どうして誰も周りには悲しんでくれる人がいないのだろう」。当時大学生だった私にはそうした現実が理解できなかったのです。それと同時に、「なぜ学校ではいのちは尊いとか、そんなことが当たり前と言われているのだろう。この世の中って間違っているのではないか。綺麗ごとばかりを教わっているのではないか。現実ってもっと違うんのではないか」等々、素朴な疑問が次々と湧いたのです。その疑問と一緒に、なにか正義とか怒りのような感情、つまりどうしてこんな世の中に生きていることを私は知らずに生きてきたのだろうといった自責の感情や、何もできない自分に対する自己嫌悪のような感覚を覚えたのです。どうして一般的な企業とは待遇面で全然違う NGO でこんなに長く働いているのかと尋ねられることが多いのですが、その理由のひとつが、いまお話ししたような大学時代の原体験なのだと考えています。

では次に、そんな私が働いている認定 NPO 法人アイキャンという団体について簡単にご説明します。設立は、1994 年。本部事務所は名古屋にあります。今活動しているのが、アジアのフィリピン、それから中東のイエメン、それからアフリカの角と呼ばれるジブチ共和国というところです。多分あんまり聞いたことのない国名かなとも思います。あとは、職員は約 50 名が在籍しておりまして、そのうち日本人は 15 名程度です。それ以外は現地のスタッフです。どういう活動をしているかというと、紛争地とか、路上生活の人が多い地域とかあとは、災害被災地など危機的な状況下で生活する人々とか子供たちに対しての生活向上の活動を行なっています。フィリピンとジブチあとはイエメンで行なっているのが紛争地での活動ですが、そこで難民キャンプ内での活動を行なったり、あとは、爆撃等で壊れてしまったり学校の再建、あるいは十分な設備ではない学校への備品提供などを行なっています。その他の活動に関しては、

フィリピンの国内で行なっているのですが、例えば路上生活をしている子ども達に対しては路上教育、つまり学校に行けない子ども達を路上で集めて、道德教育をやったり、読み書きの教育を行なったり、あるいは自尊心を高めるような教育を行なったりしています。あとは、現地に児童養護施設があるので、その施設で路上の子どもたちの保護を行なったり、あと災害被災地に関しては、災害で壊れてしまった家の再建を行なったり、発災後に被災地域へ赴き、食料の提供とか、衣類等生活必需品の提供を行なっています。それからそのほかの地域、例えば先住民の人たちが住むインフラなどが整っていないような地域とかそれ以外の収入が不安定な地域に関しては、水道の設備を整えたり衛生教育を行なったり、あとは職業訓練を実施したりしています。

では、NGO の役割についてお話しします。NGO で働いていてよく尋ねられる質問のひとつが、「どうして日本も大変なのに海外で活動するの？」です。特に最近是这样した単刀直入な疑問をぶつけられることが実は多いのです。日本もバブル崩壊以後の長期にわたる経済的な低迷とそれにとまなう問題であったり、国内的には格差が拡大したことで、子どもの貧困とか、急速な高齢化による社会問題であったり、いろんな課題が指摘されています。したがって、これほどまでに日本国内に問題が山積しているのに、どうして海外で支援活動をするのかという素朴な質問をかなり受けます。もしもみなさんがわたしたち NGO の側だったら、どのように回答しますか。ここからはあくまでも参考として聴いて下さい。みなさんにいま見いただいている写真は、私たちが生きている地球です。飛行機に乗っていると、なんて地球って美しいんだろう、なんてきれいな星なのだろう、と思わず感動しながら眼下に広がる光景を目にすることがあります。かけがえのない美しい地球ですが、よくよく見てみると、悲しいこともすごくたくさん存在しています。例えば路上生活をする子どもたちの数は、世界で1億から1億5000万人くらいであると言われています。ただ、この数は、推定でして、大体このくらいという推測です。というのも、一般的にはどこでも出生登録という制度があるものです。つまり、みなさん生まれたらお父さんお母さんが誰で、何月何日が誕生日とか、名前はとか、当然登録さ

れると思うのです。わたしも路上の子どもたちに関わる活動して思うのですが、実は世界には出生登録をしていない子どもたちが結構います。その理由としては、例えば出生登録をする場合にフィリピンではお金がかかるのですが、そのお金が払えないという事情があることと、もう一つ大きいのは、親が出生登録の存在自体を知らないという状況があります。日本の場合は、出生登録がされると、国民が1人増えましたというのが登録されるわけです。それでカウントすることができて、いなくなった場合は一人いなくなりましたというのがわかるんですが、ただ出生登録がないということは、その国の国民としてカウントをされていないということであり、そこに存在しているかどうかは誰にも分からないという現実が生まれます。ですからこうした状況で公的機関はどう把握するんだろうと考えてしまう状況ですから、すごく曖昧な数として路上の子供の数は出ているのかなと思います。そして、そのほか、悲しいこととして、例えば世界で飢餓が原因で死亡するひとの数は、1分間に17人と言われています。なんらかの病気や感染症で亡くなる方の数よりもずっと多いのです。これはある意味で人的災害であると私たちは考えています。そしてあとは、子供兵士の問題です。子どもたちが兵士として、軍隊にとられていくような状況なんですが、いま世界で約25万人位いるのではないかとされています。この地球の話です。ただ、もちろんこれも推定でして、誰も「うちは子供兵士雇ってます」とかは言わないものです。子供をそもそも働かせてはいけない、児童労働はだめとか、その中で兵隊になって誰かを殺すとか、戦争や紛争で殺されるかもしれない状況で子供を使っているわけがないので、「うちは使ってますよ」などと言えるはずがないのです。ですから、これも推定となっています。みなさんのように朝起きてご飯を食べて、勉強道具を持って学校に行く、そしてみんなと遊ぶとかではなくて、朝起きたら武器を持って戦場に行くというような生活をしている子どもたちが世界には多数存在しています。それ以外にも、貧困とかあとは格差の問題、人権侵害とか、自然災害、あとは環境破壊等々、非常にたくさん問題がこの地球上にはあります。こうした地球上に存在するたくさん問題に対して、「政府や国際機関と違う民間の

立場から、世界の問題に取り組む非営利団体」が NGO なのです。厳密な定義の方が実は分かりにくいのかなあと思うこともありますが、つまり「利益」を第一優先とせず、こういった世界の問題の解決を目的としている活動している団体が NGO です。「稼いじゃいけないのか」とよく尋ねられることもありますが、お金がなければ活動ができないので、もちろん私たちはお金を稼いでおり、活動資金を集めることにはいつも必死に取り組んでいます。あと、NGO は企業と全然違うというふうに考えている方もいるのですが、私個人の感覚としてはほとんど変わらないと思っています。企業は何か商品とかサービスを販売しながら、社会や世界で豊かさを生み出し、人々が幸せで便利な生活ができるように取り組んでいます。NGO は、貧困をなくす世の中を創るんだ、戦争のない世界を創るのだというように、その問題解決のアプローチとその向こうにある理想の社会の実現を理念として売っていることになるのです。こうした取り組みに共感してくれたり、この商品、つまりこの未来を欲しいと考え、その価値観を共有することで私たちに共感をしてくれれば、例えば寄付者になってくれたり、この団体を支える会員になったりとかします。したがって、企業であれ、NGO であれ、どちらも社会を豊かにするために存在していて、どちらも、「その商品いらないよ」とか「そのサービスの質はよくないからいらない」とか、「そんな未来を私たちは求めてない」というふうに言われれば、企業も NGO も同じように倒産をします。その意味では、私は企業と NGO は、その本質においてあまり変わらないかなと考えています。

そこで、先ほどご紹介した質問の件に戻りますが、「なぜ日本国内にも問題がたくさんあるのに海外で活動するのか」という疑問への回答を考えてみましょう。みなさんに見ていただきたいのですが、例えばこれは、みなさんが1日で家族と食べる食事だとします。コンビニもたくさんあるし、何か食べたいと思った時に、食べられるような状況に今、日本はあると思います。お肉だって食べられるし、海外から来ているバナナとか、あとは、元々日本の料理ではないパスタだったりピザだったりとかそういったものも好きな時に自分が食べたいと思えば、食べることができる環境にあると思います。ではもし、私たち

が「日本は日本で大変なのだから、海外のことなんて、やらないでおこう。日本のお金は日本のためだけに使おう、日本人は日本人のためだけに働こう」というふうに日本第一優先とした生き方を始めてしまったらどうなるのか想像つきますか？たとえば、海外からの食糧輸入がストップしたらどうなるか。豊かだった日本の食卓が激変します。お肉が消えてしまいます。それからバナナもパスタもピザも消えてしまいます。日本食大好きですという方もこの中にたくさんいるかもしれないのですが、お豆腐とかお味噌汁もないのです。実は私たち、日本食に使われる大切な大豆のほとんどを海外から輸入しています。今、エネルギー・ベースで考えた場合、日本の国内時給率は40%を切っています。昔は、日本人が食べるものは日本国内で生産されたものを食べていたのですが、いまはそういう時代ではないのです。あと、食べ物だけではなくて、みなさんの身の回りにあるものを見ていただきたいのですが、どこまで純粋なメイド・イン・ジャパンの製品があるのか、というのも考えていただけると嬉しいなと思います。着ている服とか、バッグとか、ペンケースとか、おそらくメイド・イン・チャイナであったり、メイド・イン・ベトナムとか、メイド・イン・タイランド、メイド・イン・インドネシアとかいったものが多いのではないかと思います。こんな感じで私たちの生活というのは、海外と密接に結びついています。全体としてはいままで述べてきた状況です。ちょっと説明が多くて恐縮ですが、今グローバル化が進んでいる時代ということもあって、私たちもグローバル人材を育成することを助けてくださいとか、手伝ってくださいと言われることもあります。国際人を養成するための研修を組んでくださいというふうに言われることもあります。そこでよく語られるグローバル化とかグローバル人材という言葉はすごく聞こえがよくて、かっこいいと思うのですが、ただ要は、グローバル化とはどういうことなのかというと、単純に相互依存の世界が進んでいるということだと考えています。私たちは途上国から、先ほど紹介した食糧だけではなくて、衣類、あとは労働力をもらったりであるとか、あとは大切な資源エネルギーをもらって豊かに生活をしています。安定的にそれらの資源をもらいながら、私たちが今の生活を続けていくためには、そこに貧困があっ

たり、そこに紛争が発生したり、そこにテロがあったりすると、安定的にそういった資源というものをもらい続けることができなくなります。不安定になります。ですから、世界から安定的にさまざまなものやサービスなどをもらうためには、海外も安定していてもらわなければいけない。つまり、私たち NGO がどうして海外で活動するのか、どうして日本も大変なのに海外の貧困とか紛争の問題に取り組むのかというと、単にそれは、そこに困っている人がいるからという人道的な理由だけではなく、そこには日本の豊かさとは切り離せないものがあるからであるとも考えています。私自身、それからみなさん自身、それからみなさんの大切な人や私の大切な人たちの豊かさとか幸せをこれからも守っていくためには必要な活動となっていて、決して切り離された他人事ではない、そういう社会に私たちは生きています。そうした問題意識に立つことで、NGO 活動がどうして必要なのか、その役割とは何なのか、という問題提起に対する回答として、ただ単なる人道的なものという、そこに困った人がいるからという理由だけではなくて、日本が世界で生きていくためにも必要な取り組みであるとの認識を共有していただけると有り難いと考えます。

次に、本題でありますわたちたちの活動についてお話しします。フィリピンにおける活動を、2つ紹介させていただきます。1つはパヤタスゴミ処分場の人たちとともに行なっている活動、もう一つは、路上で生活する子どもたちと一緒にしている活動です。

1つ目、パヤタスゴミ処分場の人たちとともに活動する内容です。この中でフィリピンへ行ったことある方いますか？行った方はもう見ているのでわかると思うのですが、フィリピンは ASEAN 諸国でもかなり経済発展が著しいところです。日本の経済成長率は年率 0.8%、つまり 1%未満というふうになっていますが、フィリピンは 6.2%の経済成長率になります。非常に若い労働力が多くて、どんどん、どんどん発展していて、多くの方が英語を話せるので、海外の多国籍企業が人事部をフィリピンに置くとか、コールセンターをフィリピンに置くとか、投資が活発になっています。とくにコールセンターは結構メジャーな人気の職になっているのですが、そんな形でいろんな外国の企業が

フィリピンに入ってきています。ただ、だからといってもちろんいいことばかりではなく、著しい経済発展の陰には、取り残される人たちというのが出てきます。この写真の後ろの方に映るのが、さっき見ていただいた急速に近代化する地域の高いビルなんですけど、その手前を見ると、車で所要10分程度のところに位置しますが、海の上にとたん屋根のような、継ぎ接ぎだらけのようなそんな家が見えてきます。発展から取り残されて、格差がどんどん進んでいく中で、その貧しい方に落ちてしまっている人たちの生活がここに 있습니다。その中で、取り残された場所の1つと言われているのが、フィリピンの中でも貧困の象徴の場所と言われているフィリピン最大のゴミ処分場、パヤタス地区になります。この絵はパヤタスに住んでいる子どもに、以前活動を一緒にした時に、自分の町の絵を描いてくださいと頼んでつくってもらったものなのですが、何か見えますか。子どもというのは一番印象的なものを絵の真ん中に書く傾向があると思うんですが、この子が描いてくれたのは、ゴミ山です。そのゴミ山の手前には、真っ黒に塗られた川が流れていて、その川にもゴミが流れています。それから、道端を見ると、青白い人がいたりとか、あとはゴミ山の中を見ると、なんか人間の骨のようなものがあったり、人間の上半身のようなものがあったりするのがお分かりいただけると思います。いちばん手前にある家も継ぎ接ぎだらけになっていて、あとはジャンクショップと書かれている左下の絵で、これは、ゴミ山で拾ったものを換金するリサイクルショップのようなものも描かれています。これが子供が見る、パヤタスの現状になります。ただどういうところかという、ぱっと写真に町を撮るとこんな感じになります。なにかゴミ山の存在を感じさせないような一見のどかな田舎町のような雰囲気があります。でもここには、ゴミ山が中心に大きくそびえ立っています。1960年代からゴミが捨てられ始めて、もともとはすごく綺麗な谷だったのですが、谷にどんどんゴミが捨てられて、どんどん、どんどん大きくなって行って、山のようになっている場所です。実は今このパヤタスゴミ処分場は2017年の末に閉鎖をされていて、今ゴミが捨てられるというのは、ストップしているような状況です。ただそれまでは本当に2年くらい前までは、ゴミ山から異臭が放た

れたりとか、煙が出ていたりだとか、ゴミ山の影響で病気になる人が非常にたくさんいました。町の中の細い路地も舗装されていないところが多いです。足元を見てもらうと、タイヤが置かれていて、ゴミ山から拾ってきたものを重ねて階段のようにして、ここに住む人たちが少しでも生活しやすいようにというふうに自分たちの手で町を作っているというのがわかると思います。その家も家と呼べるような感じではなくて、ベニヤ板が張ってあって、雨がしのげる屋根があってというような粗末な家になっています。ゴミ山が閉鎖されるまでは、数十台のトラックが来て、このゴミ山にゴミを捨てにきました。人々はトラックが来ると、捨てられたゴミ中に換金できるものが落ちているので、例えばペットボトルとか、缶とか、銅線や鉄くずとかそういったものを拾って前述のジャンクショップに売って、生計を立てていました。非常に事故も多いところでもあります。ビニール袋が落ちていますが、これも1キロ分拾えば、20円くらいで買い取ってもらえるのです。それがどう使われるかまではわかりませんが、ゴミ山で現地の人たちはビニール袋を好んで集めたりします。先ほどお話した通り、ここでは事故も非常に多くて、いち早く拾いたいのて人々は、ブルドーザーとかトラックが来ると、なるべく近くに寄って、一番に拾おうとして、近づきすぎて、轢かれて亡くなってしまう方もいました。あとは、鉄くずもすごくたくさん落ちているので、他の建物と比べて高い山ですから、雷が落ちてそれに打たれてなくなってしまうという方もいます。あとは、医療廃棄物がきちんと処理されずにそのまま落ちていたりします。ですからその医療廃棄物、血がついたままの例えば注射器であるとか、そういったもので足を切って病気になってしまうのです。そうした事故が絶えない場所です。よく目にするのが、ジャンクショップです。拾ってきたものをここで買い取ってもらって、それを1日の食事に当てているというのがここに住んでいる人たちの生活です。1日に稼げる金額が日本円にすると大体300円から400円くらいになります。最低賃金って日本にもあると思うのですが、ここの地域の最低賃金が1000円ちょっとだと言われているので、1日300円から400円くらいの生活をしているというのは、かなり低賃金ということがわかっていただけるか

なと思います。ですから、生ゴミを拾って持って帰って、それに火を入れなおして食べるという家族も多いんです。で、まだちっちゃい子どもとか、年輩の人とかは、それで食中毒になってなくなってしまう人とかもありました。あるお母さんから聞いたのは、「母親としてこういうことしかできないのはものすごく悔しいんだ」「本当はもっと健康にもっといいものを食べさせたい。本当はゴミ山で拾ったものを子どもたち、大切な家族には食べさせたくない。でもそうする選択肢しか私にはない」ということを聞いたことがあります。いまでも耳朶から離れません。そして2000年にすごく大きな事故がありました。それがこのゴミ山の崩落です。本当に山のようなおおきなところが真っ二つ割れて、雪崩のように周りにあった家を飲み込んでいったというものでした。このスライドには200人が死亡200人は未だ行方不明というふうにかいているんですが、この地域に住んでいる人も出生登録をしていなかったり、あとは、土地の権利を持っていないので、人の出入りがすごく激しいのです。ですから一体誰がここに住んでいて、誰が飲み込まれたのかというのが、近所の人からしかわからないような状況でもありました。ですから「そこに住んでいる人は、200人とか300人くらいって言われているけど、実際亡くなった人はもっともっと多いんだよ」という話を聞いたこともあります。未だに不明ということは、先ほど見ていただいたゴミ山の中にまだ埋まっているということです。ゴミが崩落した時は、ビニール袋がすごくたくさんだったので、ショベルカーとかでは掘り起こすことが出来なくて、結局周りの人とかが手とかスコップを使って、必死に人々を掘り起こしたというふうに聞いています。こういった状況ですから、健康被害も深刻なのです。例えば、皮膚病であったりとか、あとは目には見えないですが、気管支炎のような呼吸器障害、あとは慢性的な栄養不足であったりといった症例が非常に多いです。あとは、手が腫れている写真があるのですが、ゴミ山でちょっと手を切ったりしても、綺麗な水にアクセスする方法が限られているために、綺麗に消毒することが出来ないのも、そこから破傷風になったり、別の病気にかかったり、ということもあります。あとは、結核が蔓延している地域でもあるので、結核患者も非常に多かったです。結核の場合現

地では無料でお薬が配られるのですが、現地の社会にはそもそも薬を飲み続けるという意識がないのです。お薬を飲めば治る。お薬は飲み続けなければならぬというの、それは私たちは教育上とか学習や経験上で出来ることです。でもここの人たちによくあるのは、いくら無料でお薬がもらえと言っても、貰うだけもらって治ってないのにどっかに売ってしまうとか、飲み続けないうとか、その結果として、治らずに蔓延していくという状況がありました。こういった状況の中で、私たちは NGO の活動しているのですが、その一端をご紹介します。

まず、大切にしているのは、この活動の中心や、主人公というのは私たち NGO ではなくて、現地の住民たちだということです。NGO の活動がなくなったら元の貧しい状況に戻ってしまうとか、何も出来なくなってしまうとか、そういった活動では何も意味がないんです。現地の人ができること、力を高めていって、最終的には自分たちの問題を自分たちで解決できるようにしていくことを目指して行なっています。ただ例外もありまして、例えば紛争の緊急救援とか災害が起きた直後とか、幼い子どもたちに対する活動というのは、自分たちで問題を解決とかいってる場合ではないので、食料を提供したりとか、教育を行なったりというのは、福祉的な活動をしていくのですが、本来であれば、自立をしたりとか、自分たちの力を高めるというところに、重点をもって行なっています。パヤタスの人たちと話し合った時に、この人たちから出た意見を大きくまとめると2つの声がありました。1つは家族が健康に暮らせたいのにという声。それからもう1つは、ゴミ山の危険な仕事から抜け出したいという声。これは、ゴミ山の崩落の事故の影響が大きかったと思いますが、この2つの声がありました。1つ目の家族が健康に暮らせたいのにという要望を叶えるために、アイキャンとしては、医師による診療活動をスタートしました。当初、お医者さんをお金とか、診療代とか、お薬代というのは、全部アイキャンが負担していました。そこから少しずつ、お母さんたちをコミュニティ・ヘルスボランティア、地域保健員のような地域保健員ボランティアとして育成をしていって、病気の予防とか、簡単な処置の研修を行なっていきました。例

例えば血圧や熱を測るとか、子供を健康的に育てるにはどうしたらいいのかとか、結核だとどういう症状が出るのかとか、お薬飲み続けないといけない重要性とかそういったものを伝えていきました。そのお母さんたち、女性たちが中心となって、地域を回って、予防の大切さとか、お医者さんが来ているからぜひ来てくださいとか、結核のお薬をもらったらそれはちゃんと飲まないといけないですよ、定期的に確認しますからね、といった役割を担ってくれました。もちろんお医者さんのような治療をしたりだとか、診察をしたりということは出来ないのですが、住民の人たちが発する声、同じパヤタスという境遇で育った人たちが、他の人たちに薬を飲む大切さとか、予防する大切さを伝えるというのは、アイキャンの職員が直接伝えるとか、お医者さんがいうよりもずっと力を持つものです。「私も結核だったけど、治ったからあなたも飲みなさい」とか、「きっと大丈夫、私も出来たから、あなたもできるよ」とか、「お医者さんこわくないよ」と自発的に声を掛け合うことは、非常に力を持つものです。その後もさらにそのお母さんたちを組織化していったのです。ただボランティアで個別にやってもらうのではなくて、グループとして活動してもらうように、協同組合の設立を行なっていました。この協同組合を設立して、どういうふうにしてお金を回したらいいのか、永遠にアイキャンがお金を払い続けるということは不可能ですから、だったら、医師による診療活動、今まで無料でやってきたのですが、少しだけお金をもらおうとか、お薬を無料で提供してきたけど、これもちょっと安く、普通よりは安く提供しようというふうに、加入するパヤタスに住むお母さんたちの話し合いで、少しずつお金をもらうようになっていって、そこで、その収入でお医者さんを読んで謝金を払って、というこの診療活動がそこで回っていくようになりました。その協同組合に「ピコ」という名前をつけたのですが、このピコは、2010年にアイキャンから完全に独立をしています。それ以降、資金的な援助というのは一切していなくて、先ほどもお伝えした通り、お医者さんへの謝金とかは、わずかに徴収することになったお金で賄えていますし、あとはお母さんたちがその地域保健員として地域を回って、予防とか薬を飲む大切さとか、そういった呼びかけを続けています。このお母さんた

ちの活躍によって、この地域での健康の意識というのが飛躍的にアップしました。それまでは、健康というのは私たちにとって第一優先だと思うんですけど、パヤタスの人にとっては、健康なんてどうでもいいから1日を稼がないと、1日休んだら食べられないんだから、ちょっとくらい怪我をしていてもそれどころじゃない、というような健康の優先度合いていうのが低かったのです。そういう状況のなか、それが良くないということをメンバーになってくれたお母さんたちみずからでちょっとずつ広めていきました。

そして2つ目のゴミ山に頼らず生活できたらいいのというお母さんたちの声に対して、手に職をつける職業訓練の実施という取り組みを進めていきました。みなさんフェアトレードという言葉を知っていますか？フェアトレードってという言葉が実際に初めて作品として実を結んだのがこちらです。ネズミのお化けのようなデディベアが出来たんですが、たまたまその時に裁縫ができるアイキャンのボランティアがいたので、お裁縫だったら教えることができるから、これで何か技術訓練が出来ないかといって、女性たちにやり方を教え始めたというのがこの活動の始まりでした。学校に通っていないお母さんとか、字が読めないお母さんとか、長さを測れないお母さんとかというケースが多かったので、今でもお母さんたちに聞くと、あのトレーニングは本当に苦しかった、泣きながらやったこともあったというふうに話をしてくれる方もいます。この活動を始めたのが2001年で、今はもう2019年ですから、18年になります。この組織はずっとフェアトレード製品を作り続けていてそれを販売して収入を得ることができるようになってきました。副次的に良かったことということがあります。初めはゴミ山に頼らない収入源を得る方法として、職業訓練を始めていたのですが、ただ、パヤタスというのは差別を受ける地域でもあるのです。汚いとか、教養がないとか、学校にもいってないとか、治安が悪い地域ですから、そこに住んでいる人たちは怖いんじゃないかと、そういう差別を受ける地域がパヤタスで、自分たちがそういう差別を受けているということはお母さんたち自身も知っているんです。ですから、自分たちに自信がないし、街に出ていくことは怖い、差別の対象になるんじゃないかといって、怖

がっている人もいるんですが、自分の製品ができて、それを販売して、誰かに可愛いと言ってもらえる、買ってもらえるということが、自分が受け入れられた、自分が認められたという気持ちになるんだというふうにお母さんたちが話をしてくれました。ただ収入を得るだけでなく、自尊心を高めることができたというふうに言ってくれています。この組織も、2005年にアイキャンから独立をしていて、当初、職業訓練を始めた時は、布をアイキャンから提供したり、賃金を払ったりといったことまで全部やってたのですが、2005年を境に現地だけでおそらく運営できるのではないかということから、アイキャンはお金を一切出していないです。自分たちの売り上げから次の材料費を買って、またそれを販売して、次の材料を買って製品を作っていくというようなスタイルでまわっています。今アイキャンがやっていることというのは、ただ単にここのお母さんたちが作った商品の中で、可愛いとか、私たちがアイキャンとして日本でも売りたいなと思ったものを購入して売る、気になる点は別に買わない、という生産者と消費者の対等な関係、つまり「支援する側」「される側」ではない関係が来ています。そこで、少しこのフェアトレード生産に関わったお母さんの変化の声を聞いていただきたいと思います。ビーナさんというお母さんです。このお母さんが言ってたことなんですが、「仕事を通じて私は大きく成長しました。今は家族の生計の助けにもなれています。収入のない頃は、夫だけが稼いで、家での私の地位も低かったです。今自分も収入を得られることが、自信につながりました」と話をしてくれました。そして次、ネリアさんというお母さんです。ここのフェアトレードの生産グループの中で一番年長で、今は牛乳瓶の底のような分厚いメガネをかけて、細かい作業をしているのですが、それでも自分が必要とされる以上は、一生働き続けたいというふうに言ってくれているお母さんです。このネリアさんは2人の娘さんをもっていて、孫が一人いるんですが、シングルマザーで、自分のここでの稼ぎだけで娘二人を専門学校まで就学させ、卒業させることができたというふうに誇りをもっています。ちなみに最近、このネリアさんの娘さんの一人が専門を卒業してソーシャルワーカー、社会福祉士になったんですが、この娘さんが私たちア

アイキャンのスタッフになりました。今は、アイキャンのスタッフとして、路上生活をする子どもたちのケアやカウンセリングなどを担当してくれています。このように、未来は繋がっているということを実感できることが、嬉しかったことです。現在、ここのメンバーがどうなっているかという、当時アイキャンが行っていた、人を募集したりとか、職業訓練をしたりとか、商品開発をしたりとか、そういったことは全てここのメンバーの中でやっています。どういい商品だったら好まれるかなとか、こんなプランを作ってみたのだけれど売れると思うかといったことまでお母さんたちから私たちにたまに相談が来たり、収入が足りないというお母さんがいたら、じゃあ訓練をしているから一緒にやってみない？というふうのリクルートしてくれたり、少しでもパヤタスの人たちの収入が安定するようにお母さんたちが、以前アイキャンがやっていたことをお母さんたち自身が自らの取り組みで他の住民の方達に対してやってくれています。そして今、できた商品は、海を渡って日本でも販売をされています。この商品はただ単にその辺の、もしかしたら 100 均にもあるようなものかもしれません。キッチン用品とかぬいぐるみであれば、どこにもあるかもしれないです。ただ違うのは、この商品を通して、人々が、フィリピンにはこういう現状がある、こういう課題がある、こういうふうに頑張っている人がいるのだってということを多くの人に知らせる、その問題を知るツールとなっているということだと思っています。パヤタスでは、先ほどごみ処分場が閉鎖されたという話をしたのですが、2017 年に大雨が降ってまた崩落事故が起こるんじゃないか、そうすると世界中が注目してフィリピン政府は何やっているのだと責められるんじゃないかという懸念もあり、政府が一方的に完全閉鎖を突然決定しました。今、ゴミは捨てられていないのと、緑が植えられています。掘っても掘ってもゴミであることは変わりはないです。閉鎖されたというと、パヤタスの状況を知らない方達は、良かったね、環境良くなるね、住民たちはゴミ山に登って働かなくて良くなるからいいことだねというふうに言われるのですが、結局ゴミ山に収入を頼っていた人は、何千といるので、その人たちは収入源を失ってしまったというだけです。ではその人たちが今どうなっ

ているかという、別のゴミ山を求めて居場所を変えるか、もしくは、路上に出て路上生活をしたりだとか、あとは肉体的な日雇い労働者として、例えば一週間町の方に出て働いて、お金を稼いで戻ってくるとかといった生活を強いられるようになっていきます。今地元でもちきりになっている話題があって、ここがテーマパークになるんだという噂が流れています。誰が流したのか、確かなことは言えません。ゴミ山が2000年に崩落した時も、住民たちが仕事を失ってしまったことで、ゴミ山がないと生きていけないんだというふうに、パヤタスの住民によるデモが起こったのです。ですからもしかすると、デモが今回も起こることを恐れて、ここはテーマパークにします、それが出来たらみなさんを雇います、というふうにそういう噂を誰かが流している可能性も否定できません。中にはその噂を信じて、「ここにテーマパークが出来たらここで雇ってもらうんだ、だから今は収入がすごく少なくて困っているけど、なんとか踏ん張ってパヤタスの地域に住み続けよう」というふうに言っている人たちもいます。ちょっとこの噂の真偽はわからないのですが、というように、私たち本当に長く2000年からここでの活動をしてきました、約20年になります。達成できたこととか、乗り越えられたこととか、成功したことってというのが、結構多かったと考えています。ただ政府の一方的な方針でこのように崩れてしまった、フェアトレードの生産団体を構成していたメンバーとか、協同組合を構成していたメンバーもここでは生きていけないとなって、別のゴミ山を求めて移動する人たちもでてきていたのです。もちろんパヤタスにずっといることがいいこととは言えないんですが、ただ今まで作り上げてきたものが、なくなってしまったというような現状はあります。ただ、今、一部残っているお母さんたちでお医者さんと呼ばいながらまだ診療活動は続けていますし、ここで課題がある限り自分たちに出来ることは続けていきたいというふうに、パワタスでの活動というのは、協同組合の方たち、それから生産者の方達は活動を継続しています。

では、次に、路上の子どもたちの活動についてお話をさせていただきます。本とかテレビとかで見たことがあるかと思います。いわゆるストリートチルド

レンと呼ばれている子どもたちです。1つ目は、家があって親もいる。けれども経済的とか家庭的な事情で路上で働かないといけない子どもたち。2つ目は、家がない、親はいるが親も路上生活者の子どもたち。そして3つ目が家がなく、親がいなくて、子供だけで路上で働き暮らす子どもたち、です。フィリピンの路上の子どもたちは約 25 万人いると言われていますが、もう何年も前からこの数字は変わっていないので、先ほどもお伝えした通り、この数字は推定であり、きちんとした数は把握できていないと思います。そういう子どもたちはどういうところに住んでいるかというと、人の邪魔になるところに住んでいると、暴力を受けたり、暴言を吐かれたりすることがあるので、例えば交通量の多い道路の中央分離帯で寝ている子どもたちもいます。それがどこかのレストランの前とか、誰かの家の庭とか庭先とかとなると、路上の子どもは怖いから「お前どっか行けよ」と追い払われたりとか、殴られたりとかするのですが、中央分離帯のようなところだと大人が立ち寄らないので安全だと子どもたちは思って生活をしています。実際に1日1食食べることもなかなかままならないような子たちも多いです。この写真に写っている子を見てもらうと、地べたにお皿が置かれていて、そこから白米だけを食べているような感じです。私が活動で出会った子どもでも、ほんとに家も家族もない路上の子どもたちの場合、現地に行かれて子どもたちにあった方達はお気づきかと思いますが、日本の子と比べるとなんか細くて、年齢の割に体が小さいのです。慢性的に栄養不足ですから、なかなか日本人のように身長が伸びていかないのです。その中に一人の男の子がいました。わたしはその男の子とよく話していました。年齢を尋ねると、12歳というのです。ちょうど日本でいう小学校6年生だというふうに思っていました。ところが、幸運にもたまたまその子の親に会う機会があって、よくよく生まれた時の話とかをしていると、どうも年齢が合わないということになりました。よく計算すると17歳だったのです。17歳というと、高校三年生です。日本だったら高校三年生の男の子と小学校6年生の男の子であればパッと見れば、多分体格の違いでわかると思うのですが、わたしは全然わからなかったのです。そのくらい、栄養不足で体が十分に発育していないのです。それか

らシンナーの影響も非常に重要な課題となっているのです。子どもたちの多くはシンナーとか薬物経験があります。薬物は自分が吸ったとがなくても、例えば運び屋としてやっていたことがあるとか、売っていたことがあるとか、そういう子供たちもいます。私たち活動の中で薬物が私たち体に与える負の影響、体に良くないよとか、歯が抜けちゃうよとか、まともに考えられなくなっちゃうんだよ、とかそういうことも伝えているのですが、子どもたちはわかっているんですが、どうしてもやめられないというケースもあります。それはなぜかという、シンナーとかを吸うと、空腹を紛らわすことができるし、喉の渇きとかも感じなくなったりだとか、あとは自分が路上生活をする子どもであるというその悲しさ、自分には大事にしてくれる親がいない、だとか昔振るわれた暴力とか、あとは、暴言を吐かれたこととか、そういう心の傷みたいなものも分からなくなるからだと思います。わかってはいるんだけど、やめられないんだという子どもたちも多いです。ここも子どもたちが住んでいるところのひとつ、橋の下です。衛生環境もすごく悪くて、中には、ネズミにかじられてなくなってしまった子どももいました。線路上とか線路脇に、暮らしている人たちもいます。先ほどもお伝えした通り、そこが誰かの土地、レストランの前であるとか、誰かの個人の家の庭先だと、路上の子どもたちって悪いことをするっていう先入観があるので、みんな追い出したがるのです。邪魔者にする。野良犬とか野良猫とかを追いかうのと同じように、ちょっと表現は悪いかもしれませんが、見ていたり聞いていて、それと同等に近いような扱いを受けていると感じることもあります。ですから、こういうひとの立ち寄らないところ、たとえば線路上であれば、別にお店があるわけでもないですし、誰かの家が近くにあるわけではないので、そこの隅っこに暮らして、電車が来た時にどいたりとか、街中を転々としながら生活をしています。ただ、シンナーとかは吸っていて、テンションが高くなっていたりだとか、物事の判断が出来なくて、線路で引かれてなくなってしまうような子どもたちもいます。子供ギャングとかを聞いたことがあります？ テレビでも扱っていたことがあります、集団でスリをする子供のグループとかがいたりするのです。そもそもそれは犯罪ですから悪いことに変

わりはないのですが、罪を犯すことに、例えば盗みとかスリとか手を染めてしまいう例が後を絶ちません。ただ子どもたちがなんでそんなことをしているのだろうと思った時に、これ以上放っておけないとの思いから自分たちで支援の仕組み（福祉）を作り上げていることを考えました。私たちって日本に暮らしていると、たくさんの社会的な支援（welfare）に守られながら生活していますよ。例えばわかりやすく言うと、国からの福祉です。広義の意味で考えると、社会保障とかがそれに当たります。あとはアメリカからミサイル飛んでくる、北朝鮮から飛んでくるって言う時に、日本国がなんとか守ろうとしてくれるという意味での安全保障もそうでしょう。あともう1つは、地域からの社会的支援というのも、わかりやすいものです。みなさんが大きくなるに当たって、学校の先生からいろんな教育を受けたりとか、危険から守ってもらったりとか、地域見守り隊の横断歩道でなんかやってくれるおじさん、おばさんもいたりとか、そういう社会的支援も受けています。そして、3つ目最もわかりやすいものとしては、家族からの支援です。これは物理的な暴力だけではなくて、危険になる情報とか、健全な成長を妨げるものに対して、お父さんとかお母さんが、子供を守ってくれる。こういった社会的支援（扶助）もあります。ただ、路上生活をしている子どもたちにはこれがないのです。出生登録がなかったりとか、地域の人に邪魔者扱いされたりとか、親がいなかったりとか、そこでは社会的支援の対象から抜け落ちているのです。その結果その子どもたちは自分で自分を守るしかないのです。そういう子どもたちが集まることによってお互いを守り合うのです。ですから自分たちで作った現実的な意味で支えあう仕組みなんだろうと思うようになりました。きっとそれがダメなことなんだからと言って、無理やり分解させたり抜けさせたりすると、おそらく生きていくこととか、自分で自分を守ることが余計難しくなるかもしれないというアンビバレントさを感じています。あと、路上の子どもたちというのは、生きるために路上に出てきているのです。実際に現地で路上の子どもたちを担当するまでは、子どもたちは、この表現が正しいかはわかりませんが、否応なく路上の子供になったかと思ってたのです。しかしほとんどの子どもたちが、実は自分の意思で路上の

子供になるのを選んでいっているというふうに、私が接する中で、接した限りの子どもたちからは感じています。というのも、家にいても例えばご飯がもらえないとか、食べさせてもらえないとか、自分が生きるお金は自分で稼がないといけないとか、家族のための生計を自分が稼がないといけないとか、そう言った理由で、家にいたりとか、学校に通うのではなくて、自分で路上に出て、働いて稼ぐことを選んだ子どもたちです。ですからほとんどの子どもたちが仕事を、ほとんどではなく100%の子どもたちが、何かしらの仕事をしているのです。例えば、写真にあるような、ペットボトルとかを集める廃品回収業、つまり何キロ集めて、いくらで買い取ってもらおうという仕事をしている子もいれば、その次の子は、花を編んでいるところなんです、花を編んで、花を売るような仕事をしていたり、あとは、バスが走っているのですが、バスにお客さんを呼んで乗せて、いっぱいにしたら、20円とか10円とかもらえるような仕事をしていたりします。あるいは物乞いをしている子たちもいます。現地の子に聞くと、お仕事何かと自己紹介してもらおうのですが、僕は仕事、物乞いしてます！という子もいます。比較的年齢の低い子どもが物乞いのお仕事をしています。現地のスタッフの提案を受けて、私たちNGOの取り組みで、その物乞いをしている子たちが病気になるべくならないように、その予防ができるように、たとえ子どもたちが病気になってしまっても簡単に病院に行って治療を受けることができないので、病気にならないように予防の説明とか保健の教育とかをしています。綺麗にしたがらない子たちもすごく多いのです。なぜか爪を切りたがらない、あとは服を洗いたがらない、身なりを綺麗にしたがらないという子がよくいます。それはどうしてなのかというと、綺麗にしようとして、自分が物乞いとしての価値がなくなってしまうんじゃないか、稼げなくなっちゃうんじゃないか、というふうに思っている子が多いと現地のフィリピンのスタッフから話を聞きました。すごく過酷な生活をしている路上の子どもですが、ここに大人からの暴力も加わります。私がここ10年NGOで働いてきた中でもすごくたくさんの子たちが亡くなっていました。中には、亡くなっていなくても傷つけられた子たちも多かったのですが、あるいはその寝ている時に、酔っ

払いに箱に入れられて火をつけられたという子供もいましたし、多分大人のストレス発散の場として、野良犬とか野良猫をいじめるような感じで、暴行を受けたり、リンチを受けるというケースもありました。あとは、麻薬関係の仕事をしていた子どもは、その麻薬の大元は、子どもは比較的雇いやすということもあり、払うお金は少なくとも済むし、万が一捕まっても子どもであれば罪が軽いじゃないか、そういうこともあって、結構子供も気軽に雇ったりするのです。ドゥテルテ大統領って聞いたことがありますか？ フィリピンの大統領なんですけど、そのドゥテルテ大統領が誕生してから、麻薬を使っている人とか、その関係者の射殺を容認するという、超法規的で、結構過激なやり方が行われています。そうってから、子どもが捕まると、口を割ると自分がボスだってわかってしまう、そうすると自分も殺される、射殺されるんじゃないかということで、口封じのために子どもを殺したりとか、雇っていたはずが殺したりとか、あとは、殺された子どもの中には、子どもを拷問して、口を割らせて、大元を見つけようという警察のやり方もあって、そのまま殺されてしまった子どももいました。その殺された子どもも、ゴミ袋に入れられて道に捨てられていたのですが、爪が全て剥がされていたのです。これは拷問の証拠と言えます。そのゴミ袋の中には、次はお前たちだという名指しのメモ書きも残されていました。というような感じで、本来であれば子どもとはこんな扱いをされるべきではないし、そのような恐怖の中、そのような危険の中で生きていくべきではないのです。ただ先ほども言った通り、社会的支援の仕組み（福祉）がない、守ってくれる人たちがいないということで、その結果としてどれだけ危険な中で子どもたちが生きているのかというのがお分かりいただけるかと思います。

私たちのそういった路上の子どもたちに対しての活動として、まず 2008 年から、アイキャンの路上の事業がスタートしました。子どもたちというのはどんどん、どんどん増えていくのです。子どもが子どもを産んで、13 歳とか 14 歳で子供を産んでどんどん増えていくので、なんとか出口を塞ぐことが出来ないかということで、村役場とかに行って路上の子どもが望まない出産をしなくてすむ地域づくりが出来ないかという話し合いを始めたとか、あとは、親へ

子どもが持つ権利の理解を促進して、働かせるべきではないとか、健康を守らなければならないとか、危険な仕事に従事させてはいけないとか、そういった社会活動を行ってきました。あとは、そこからの奨学金を提供したりだとか、学校に戻れる手続きをしたりとか、あとは出生登録をし直す活動とかをしたりしてきました。その結果、ツアーを通してフィリピンに行った方は訪問されたかと思いますが、ドロップインセンターという一時保護施設の運営をしていました。2008 年末から今年の3月まで運営を行っていました。ここではもとも栄養改善の食事提供をしたりとか、怪我があったらその治療をしたりとか、識字教育をしたりとか、あとは、歯磨きができたり、服を洗えたり、衛生教育もここでやっているの、そういったことも教えたり、あとは掃除をしたり、ご飯の準備もしています。社会のルールを覚えてもらうため、時間になったら準備をするとか、役割分担をするとか、私たちはお父さんお母さんと一緒に育つ中で知らず知らずのうちに身につけていることが身につけていないので、そういったものを学ぶ場として機能していたのがこの施設です。今はどうなっているかという、2018 年の3月で、アイキャンから地元フィリピンの団体にこの活動が移行しました。今は、地元2つの団体がアイキャンのやっていた活動の一部を引き継いで継続してくれていて、アイキャンのスタッフはそこを回って、モニタリングをしたりとか、子どもたちの就学状況とか、家庭の状況とか、そういったものの聞き取りなどを行なっています。それ以外にフィリピンでは、路上生活をする子どもたちが多い地域があるのですが、たとえばそれが墓地です。住む場所がなくて、墓地に住んでいる家族とか子どもたちがいます。そういった子供たちを集めて、昔ドロップインセンターが出来る前にアイキャンがやっていたように、地域の子どもたちを集めて、教育の大切さとか、健康の大切さとか、衛生の大切さとかそういったものを伝える活動を、今いろんな地域を回っている実施しています。ここで、保護が必要だと判断された子どもとか、親と和解が難しいと思われた子どもたちに対しては、アイキャンのもう1つの活動である長期保護施設、子どもの家での保護をするように動いています。この施設に行かれた方もいると思うのですが、みなさん行かれた時は、

2015年に1階部分の建設が終わって、それ以来ずっとそのままの状態だったのです。資金不足で2階部分を建てることも出来ずに運営をしていました。ただ子どもたちは、6人住んでいて、生活をしていたんですが、ようやく建設資金が集まり、ご寄付もいただいて、これも2018年の3月に2階部分がようやく増築できることになって、今は立派な施設になっています。ここには、お母さん役の寮母さんが2人とお父さん役の寮父さんが1人住んでいます。ここでお父さんお母さんと暮らしながら子どもたちは学校に行き通っています。ここに住んでいる子供にとっては、ここが人生で初めて、自分が持てた安心できる家のようなものです。安心して暮らしている笑顔を見ると私も嬉しくなるのですが、同施設のお母さんお父さんにしっかり懐いて甘えて生活をしています。こうした施設に住んでいる子どもたちですが、私がすごく大切にしている写真があります。すごく気に入っている写真です。そのうち二人の子どもたちは、先ほど見ていただいた線路上の地域、あそこに住んでいました。そかれらを保護し現在は長期保護施設に住んでいるんですが、線路上に住んでいたときから私は交流を続けてきて、その時は体もすごく小さくて、排気ガスとか垢とかに汚れていて真っ黒でした。手とか足も常に汚れているような状態だったのです。当時の写真を見ると、安心できる生活環境の中で、勉強したりだとか、寮母さん、寮父さんに守られて生活していくことで、目には自信が満ち溢れて生き生きとした表情をしていると感ずることが出来ます。この子どもたちは、どんな過酷な過去があったとしても変われるのだという、他の子たちの希望にもなりますし、私自身の誇りにもなっていると感ずています。ただ、ここに保護する子どもというのは、本当に望みがなくなってしまった子ども以外は、出来れば私たちは親から引き離したくないのです。それよりも親を説得して出来るなら親元に戻したりとか、子どもは親と一緒にいたいと思うので、出来ればそこで生活していけるように最善を尽くすのですが、ここにいる子どもたちというのはそれらが全て叶わなかった子になります。中には、家族が全員亡くなってしまった子とか、家族に捨てられて、探したけども見つからなかった、それ以降からきちんとした自分の記憶がない、おそらくショックすぎて忘れてしまった

のかどうかわかんないんですが、本当の名前かどうかもわからない子がいたりもします。まだまだカウンセリングが必要で非常にデリケートな状態で、夜急に一人になるのが不安になって寮母さんに隣で寝ていいかと言い出す子もいるのですが、自分の心の傷を少しずつ乗り越えながら、社会に戻れるように頑張っている子どもたちがここに住んでいます。

では最後に、子供の声をいくつか紹介したいと思います。ここに住んでる子ではなくて、今まで一緒に活動してきた子の活動を通した変化を聴いていただけると嬉しいです。「大人たちからかわいそうだという目で見られたり、汚い目で見られて傷つくことがある。だから学びたい。貧しくても僕は弱いわけじゃない。悪いことをするのではなく、たくさん学んで力をつけて、周りの大切な人や自分自身を守りたい。」というふうに話をしてくれた路上の子がいました。あともう一人ご紹介します。「いつも寝ている駐車場の車から、エンジンが盗まれた。僕は警察に捕まって殴られた。大人は僕たちをダメで未来がない人間だと思ってる。だけど知って欲しいんだ、路上の僕らにだって、将来の夢や希望があることを。将来ちゃんとした仕事について、みんなに言いたいんだ、僕は昔路上の子どもだったんだよって。」というふうに言ってくれました。自分が路上の子どもであったということは、本人たちにとっては恥ずかしいことなのです。親がいない、ちゃんと勉強できていない、子どもたちにとっても隠したい過去ではあるのですが、この子はそれを自分の言葉で話してくれました。自分の体験を言葉にすることで他の子どもの希望に僕がなれるんじゃないか、僕に出来るんだったらみんなにも出来るよと言ってくれました。わたしたちアイキャンが大切にしていることなのですが、目の前の問題を私たちが解決するのではなくて、人々の力を伸ばす機会を作って引き出すことで自分たちで問題解決できるようにしたいなと思っています。成長するチャンスを私たちがやりすぎることで、奪わないように心がけています。そうすることで、人も地域も強くなっていくものだと思います。

あと最後に、日本の方々とともに行なっている活動を少し紹介させていただいて、終わりたいと思います。特に日本の人たちとともに行う活動を大切にし

ています。例えば本日のようにお話をさせていただいたりとか、ツアーを組んで日本の方達に現地に来ていただいたりとか、ボランティア活動に参加していただいたりとか、そう言う機会をなるべく作ろうというふうに考えています。というのも、世界の課題を知って、それを自分ごととしたりとか、あとは現地の人たちと対話をすることによって、どうしてこんな問題が存在するのか、それに対して自分は何が出来るのかということを考えていただく機会を作りたいなと思っているからです。10年にわたり NGO での活動にたずさわってきて、悲しいこととか悔しいこととか、本当にたくさんありました。NGO に入る時は憧れとか、カッコいいなという気持ちがありましたし、NGO に入ったら世界を救える、人々を救えるというやや理想主義的な気持ちもありました。ただ10年経って振り返ってみると、達成できたことというのは本当に僅かだったなあとというふうに思っています。まだまだこの世の中には貧困もありますし、紛争もあります。大切にしている子どもたちの中には亡くなってしまうこともありますし、目の前にいる、昨日までいた子どもたちを救えない現状もあります。なんて自分は無力なんだろうと思うこともあります。この10年の中、どれだけ泣いたかわかりませんし、どれだけ眠れなくなったかもわからないくらい仕事を NGO でしてきました。ただ同時に思うことは、NGO だけで世界を変えることはできないんだとこの10年で気付いたのも事実です。それは NGO だけでなく、どこかの有名人とかどこかの有名な政治家、それから有力者、頭のいい人とか、そういう一部の人のちからだけで世界は絶対に変えられないっていうのも、私はこの10年を通して実感しています。世界とか社会という共同体は、一人一人が構成員なのです。みなさん一人一人の向かう方向によって未来という運命は決まります。これまでの世界には、戦争とか貧困とか差別という不条理がありました。そして今もまだ戦争もあるし貧困もあるし差別もある世の中に私たちは生きています。それでは10年後とか20年後とか50年後の社会には貧困とか戦争の問題はあるのでしょうか。よくあえて人に質問を投げかけてみたりします。無くならないんじゃないかなあととか、無くなっていたらいいと思うけど、難しいと思うなあととか、いろんな返事をする人がい

るんですが、これからくる未来に関しては私たちが日々何を選択するかによって、社会の構成員であるということを意識して行動することによって、きっとこれからの未来を変えていけると信じています。ですから本日の講演会が、50年先になるか、80年先になるかわかりませんが、いずれ貧困のない世界、紛争のない世界を目指す、その一歩となればなと思っています。最後駆け足になってしまいましたが、これでお話を終わらせていただきたいと思います。みなさんご清聴ありがとうございました。 (文責:上村信幸)

追記：本講演録の作成に当たり、政治行政学科ゼミ生の斎藤香純さんにお手伝いいただきました。記して感謝します。